「県民と県議会との意見交換会」　金ケ崎町会場　の概要

〔日　時〕　令和５年４月25日（火）13：00～15：00
〔場　所〕　金ケ崎中央生涯教育センター　多目的ホール
〔テーマ〕　スポーツによる地域活性化について
〔参加者〕　（６名）
司　東　道　雄（特定非営利活動法人フォルダ　ゼネラルマネジャー）
佐々木　千　聖（遠野市陸上競技協会　会員）
小野寺　留　美（一般社団法人一関市体育協会　事業課長）
菊　池　拓　巳（奥州湖交流館　館長）
工　藤　　博（ｎｏｋｋａ　代表）
黒　澤　一　男（金ケ崎町体育協会　会長）
〔出席議員〕（８名）
岩城元議員（座長）、郷右近浩議員、千葉秀幸議員、佐々木茂光議員、川村伸浩議員、高橋穏至議員、佐々木朋和議員、千田美津子議員

◆　参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

○司東さん

特定非営利活動法人フォルダは総合型地域スポーツクラブといい、国が進めている。約20年前から活動しており、多い時期には年間50種目くらい生涯学習を含めたスポーツ活動を行っており、年間延べ30万人程度が参加している。日本全国で3,600くらいクラブがあるが、その中でもトップクラブであると評価されてきている。岩手インターハイや岩手国体の業務を受託したほか、日本代表としてスイスのジュネーブに行って、学会で発表するなど海外にも視野を向けて活動している。

現在の活動としては、新体操やスキーなどがメインで、岩手出身のオリンピック・パラリンピック選手等にスポンサーとして支援、スポーツタレントのマネジメントなどを行っている。岩手県ではアウトドアスポーツのツーリズムを担当しており、個人的にはいわてスポーツコミッション顧問として33市町村を回って支援する活動をしている。

今コロナ禍が落ち着いてきており、海外からも旅行客が来ている中で、体験型の観光がこれからの肝になると思っており、岩手県をアウトドアスポーツで交流人口をふやしていこうと考えている。

○佐々木さん

新潟県出身で、結婚を期に遠野市に移住した。20年近く陸上競技をしてきて、学生時代はインターハイ女子400ｍで優勝し、ジュニアでは世界大会に出場したり、社会人では新潟アルビレックスランニングクラブで選手としてとして活動した。

岩手県ではママアスリートとして活動しており、今年度ＴＲＣ（遠野ランニングクラブ）を立ち上げた。岩手県ではアスリートとしての活動の場所が無かったこと、子供たちから陸上をしたいけれど指導を受けられず困っているという声があったこと、部活動の地域移行後の活動の場とすることが立ち上げの理由である。ＴＲＣの活躍が地域の活性化に繋がればと思って活動している。

○小野寺さん

一般社団法人一関市体育協会は、一関市周辺の８つの地域の体育協会と合併して設立し、10年以上が経過した。健康増進やレクリエーション事業などを行っているほか、50以上の施設の指定管理をしており、それらの施設を活用してスポーツ教室などを開催し、スポーツの楽しさを広めたり、生涯ス

ポーツに取り組む窓口になるために活動している。
　スポーツ指導員として健康講座などでの運動指導を通じて住民とコミュニケーションを図りながら、健康づくりのための情報提供を行う業務も行っている。事業課長、スポーツ指導員を兼務し、ソフト・ハードの両面で、事業を運営している。

○菊池さん
　希望郷いわて国体で胆沢ダムの麓に奥州胆沢カヌー競技場ができたが、カヌーは競技者でないと難しいところもあるので、大人から子供まで参加できるラフテティングを使った観光を広めたいということがきっかけで始めた。
　現在はスタンドアップパドルボードを体験できるほか、海外でも有名な水難救助のレスキュー３講習などを行っており、消防士も参加している。
　また、子供たちを対象に安全講習会を開催しており、年間100人以上の小学生が参加している。コロナ禍をきっかけに利用者は倍増しており、現在は年間600人くらいの利用者がいる。
　胆沢ダムのエリアを使って、アウトドアスポーツを使った観光を頑張っていきたい。

○工藤さん
　青森県弘前市出身で、弘前工業高校でクロスカントリースキーを始めてインターハイなどに出場したほか、カヤックでも国体に出るなどいろいろなスポーツを体験した。同志社大学を経て実業団では同和鉱業株式会社で2002年のソルトレークシティオリンピックに出場し、１年後の29歳で引退した。
　引退後はスキーから離れて、注文住宅の営業をしていたが、４年前に宮城県仙台市から西和賀町に移住して、現在は木製雑貨や家具の製造を行っている。
　15年前から東北大学医学部スキー部でコーチをしているが、コロナ禍で大会を取り上げられたとき、スポーツの必要性という原点について考えさせられた。
　大谷翔平選手、佐々木朗希選手、小林陵侑選手などのテレビに取り上げられるようなプロスポーツと、一般の人が楽しむエンジョイスポーツなどいろいろなかかわり方がある中で、本日は一般的なスポーツの概論ではなく、岩手ならではのスポーツの取り組み方について意見が聞けることを期待している。

○黒澤さん
　金ケ崎町は人口が少なく、種目別協会の規模も小さいので苦労もあるが、６つの生活圏と19の種目別協会を構成団体として活動している。スポーツ施設の指定管理者のほか、今年で69回を数える町内一周駅伝競走や町民スポーツ大会、金ケ崎マラソン、ＪＤリーグ（ソフトボール）に携わっている。
　最近始めたこととしては、５年くらい前から各幼稚園を回って運動を行う幼稚園児運動スイッチオン事業という取り組みも行っている。
　社会の変化が早く、様々な課題があるので、金ケ崎町のスポーツ環境を考える会を立ち上げて勉強会を行っているが、今はステージに合った運動をするための塾のようなものをつくりたいと考えており、年代に合ったスポーツ活動を通じて、生涯スポーツに繋げていきたいと思っている。

◆　意見交換

○高橋穏至議員
　部活動の地域移行について、大きい学区で生徒が多いところは、指導者も結構いるため、その中でスポーツ活動ができるが、小規模校だと受け皿がないと思う。小中学生の受け皿としての地域スポーツのあり方について伺いたい。
　また、私の子供が小学生の時は、小学校ごとに地域のクラブがあったが、中学生になると学区が違

うためバラバラになってしまい、生徒も足りず１チームも組めないという状況であった。指導者の問題でなかなか難しいところではあるが、現在活動している地域でこうなったらいいのではないかという感想等をお聞かせ願いたい。

〔回答：司東さん〕

地域移行ということで、国では総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団を示した。総合型地域スポーツクラブは、全国で約3,600クラブあるが、このうち部活動を受け入れるのは100クラブもないぐらい厳しい状況であり、部活動を総合型地域スポーツクラブへ移行するのは無理だと感じている。

そこで、練習試合を含め、公式の試合はすべて、野球協会やサッカー協会などの各種目の協会が行っており、審判に関してもその協会の方が審判をしているので、大会を含めて考えると、各種目の協会に委託するのが一番いいのではないかと思う。

財源については、文部科学省では、地域の指導者を支えるためには、国が継続して財源を出したいという考えだが、財務省は、受益者が負担するべきという考えである。今のところ国では負担しないと言っているため、あとは県で出すしかないのではないかと思っている。

〔回答：小野寺さん〕

子供たちがスポーツを続ける場としてスポーツ少年団などがあるが、少子化の影響により、スポーツ少年団の団員数が減っている。そういった団体は、声を掛け合って複数のスポーツ少年団が合同でチームを編成している。

部活動の地域移行については、種目別競技協会によっては指導者がいない場合がある。スポーツ少年団であれば、スタートコーチ養成講習会が年に２回行われているが、スポーツ少年団で指導する方々の多くは、父母やボランティアの指導者で、仕事があるため、休みの時間を調整しながら、みんなで協力して行っており、こういった講習会に参加することが難しい状況である。

そこで、学びの場としての養成講習会を年に２回ではなく、岩手県全体で会場や日程をふやす取組が必要。日程も平日や土日に開催するなど選択肢をふやして、学びの場に参加できる体制づくりが必要だと思う。

スポーツ少年団や総合型地域スポーツクラブなどは、それぞれの課題があると思うが、目標は子供たちへのサポートを続けていくことであり、子供たちのスポーツを支えていく気持ちは同じである。それぞれの話を聞きながら、解決方法にはいろいろな手段が必要であり、複数の団体の連携が重要だと感じている。

〔回答：黒澤さん〕

中学校の部活動は難しい課題であるが、金ケ崎町では部活動以外にスポーツ少年団の活動をしていく形がふえていくのではないかと思う。

部活動の地域移行を引き受けた場合、継続性が必要だと思う。引き受けた以上、簡単に止めていいものではないので、継続性を大事にしながら、いかに学校で行っている部活動と同じような雰囲気でやれるかというのも課題の一つになると思う。

また、先ほど話があった、トップを目指す子供と、楽しみたい子供がいるため、どちらも活動できる部活動というのも課題である。

スポーツ少年団も人数が少なくなってきているが、極端な例だと、一年生からメンバーに選ばれていたり、それでも足りなくてほかの市町村と一緒に活動していることもある。低学年が高学年と同じ練習をすることで、スポーツが嫌いになってしまうのではないかと懸念される。

部活で精一杯やった子供たちが、社会人になって地域でスポーツ活動をしてくれないのは、燃え尽き症候群的なところもあるため、もっとスポーツを楽しめる場所をつくりたいと思う。

また、スポーツ活動は、費用がかかったり、親が共稼ぎの場合、学校以外の場所に移動することが大変だったりするので、自己紹介の際に話した、塾でどこまでできるのか考えている。スポーツ活動が負担にならず、楽しめる子供たちをつくっていきたいと思っている。

○高橋穏至議員

陸上競技では、他のスポーツとの掛け持ちをする子供も多く、学校ごとの垣根が低いが、サッカーなどのチーム競技は選手を囲ってしまい、地域移行が難しい。垣根を破っていけるように今後とも御意見をいただきたい。

○千葉秀幸議員

さまざまなイベントを立ち上げて活動されているお話を伺ったが、そのイベントをどのように周知していくかが非常に難しいと思う。ＳＮＳや新聞、マスコミなどを通じて周知することになると思うが、スポーツの発信に努めている方々のためにも、行政のもっと積極的な周知や後押しがあればいいのではないかと感じている。

奥州市では、「ぽちっと奥州」というアプリを使って、奥州市のさまざまなイベントを周知しているが、行政の取り組みだけではなく、さまざまなイベントを掲載することで、多くの人に来てもらえて、いろいろな組織や団体に非常に成果が出るのではないかと思っている。情報発信に対する行政のかかわり方について、考えを伺いたい。

〔回答：佐々木さん〕

チラシ、ポスター、ホームページのほか、学校へチラシを配布し、周知を行っている。

また、初めての取り組みとして、陸上を気軽に楽しめるということを遠野市民に伝えるために、遠野市の街中でのストリート陸上の開催を考えており、その運営費を遠野市のふるさと納税のクラウドファンディングで資金を募っている。

〔回答：菊池さん〕

チラシを奥州市内に配布したり、ホームページやじゃらんへの掲載などでＰＲしている。

年間約600人近くの利用者がいるが、半分が仙台圏からで、残りの半分についても奥州市内より盛岡圏からの方が多く、地元の奥州市民にもっと知られる機会があればと思っている。

〔回答：工藤さん〕

岩手県に移住して４年になるが、県内全域でどれぐらいのスポーツイベントがあるか知らない。漠然とその辺の地域でやっていると思っても、一覧として具体的に見たことがないと思うので、例えば、いわて県議会だよりなどの広報紙に、今年１年のスポーツイベントを掲載し、見える化をしてはどうか。数が多く集まることで凄みが出てくることを、西和賀町の道の駅でクラフトマンのブースを出させてもらった際に感じた。県内のスポーツイベントが一覧で見えると、岩手県はスポーツが熱いという印象になるのではないか。

ほかにも、他県の人たちが往来する空港や新幹線の駅に、岩手県出身のトップアスリートの写真などを使いながら、インターネットで検索しなくても、瞬間的に目に入ってしまうような仕掛けはどうか。

○千葉秀幸議員

協会などであれば、行政と連携することで情報発信をしやすいと思うが、特に個人の場合は周知に

苦労しているのではないかと思う。
　県外にも情報発信をされており感心したが、地元への情報発信が弱いというのは感じている。
　イベント開催後の新聞記事などを見て、事前に知っていたら行きたかったと思う人もいると思うので、情報発信の仕方を参考にさせていただきたい。

○郷右近浩議員

　地元の中学校では部活動が任意になり、体験入部に10人来ても３人しか入部しない等、寂しいところもあり、夢中になってもらえるものがあればいいと思う反面、部活動のあり方の色々な形を模索しなければならないと思う。
　部活動も囲い込みではなく、色々な競技に触れ合える機会や、子供から大人までがスポーツに触れ合える、生涯スポーツの環境整備が必要であると思うが、競技団体の横の連携についてどのように考えているか伺いたい。

〔回答：司東さん〕

　特定非営利活動法人フォルダを立ち上げた理由の１つとして、日本は子供の頃にスポーツを１種目しかやらないことへの違和感があった。海外では子供の頃から多種目のスポーツに触れ、大人になって種目を絞っていくが、日本では、例えば、幼稚園児の頃からサッカーをやると大学までサッカーしかやらない。そこで特定非営利活動法人フォルダでは、大会には出ずに、その種目を楽しんでやりたい子供たちにやってもらうという方針が成功につながったと考えている。
　部活動については、土日が地域移行となっているが、土日もスポーツ漬けということが本当にいいことなのか疑問である。土日は部活動ではなく、家族でアウトドアスポーツをするなど、家族との時間が大切であると考えている。
　岩手県には全国に誇れるアクティビティがたくさんあるが、県内の人はわざわざ県外に行ってラフティングなどをしているため、すごくもったいないと感じる。アクティビティは、競技ではなく、勝ち負けでもなく、家族みんなで体験できるスポーツであり、県内に広めていきたいと思っている。
　今の旅行者は、現地に行ってから行き先を決める人がふえてきているため、宿泊施設の従業員や観光協会などの関係者に、岩手県では何ができるのか聞くことがあるが、地元の関係者がアクティビティなどができる場所を知らないという状況である。まずは地元の関係者が体験して知ることが広報になると考える。

〔回答：工藤さん〕

　我々の世代は、部活に入っているのが当たり前という部活ありきの人間であるため、部活動をする子供が少ないのは残念に見えるが、スポーツの本質は楽しむことであり、部活に入らなかったとしても、他に何か熱中するものがあればいいのではないかと思う。
　そもそも、子供たちにスポーツを勧めるが、大人たちがスポーツをしていなかったり、スポーツをしていた子供たちも大人になるとスポーツをしなくなるという現象が起こってしまうのが、今の日本のスポーツ界である。
　フィンランドでは、14歳以下の全国大会は実施せず、ジュニアのうちは、いろいろな種目を経験させ、ある程度体ができ上がり、メンタルが整ってきたところで向いている種目に力を入れるという方法でトップアスリートも生み出しており、また、スポーツ習慣が根強く、７割の人が週１時間以上運動している状況である。
　一方で、ジュニアスポーツをしている子供たちが多いから指導者が必要になってくるという見方もできる。本当にスポーツをしたい子供たちだけが集まるのであれば、指導者や親の負担も今ほどはな

くなるのではないかと思う。そのためには、生涯スポーツとしての意識が高まることが必要であり、生涯スポーツの意識が高まることで、スポーツに対する取り組み方がこうでなければならないということがなくなり、親子で楽しんだり、部活に入らなくても土日は親がスポーツを教えたり、地域で協力して取り組んだりということがもっと普通にできる土壌が広がるといいと思う。

また、数多くのトップアスリートを輩出しているＩＭＧアカデミーでは、ここにはトップアスリートだけがいるわけではないため、目標に対してどのようにアプローチして達成していくかを教えることを大事にしていると伺った。トップアスリートの育成事業だけではなく、スポーツを通じての成功体験を味わうための教育をしていく機会があるといいと思うので、岩手県のスポーツに対する価値観が、ほかの県とは違うというところを広げてみるのもいいと思う。

〔回答：黒澤さん〕

私も土日の部活動には反対である。

金ケ崎町では森山陸上クラブというものがあり、25年ぐらい続いており、小中学校の先生や、小学生からマスターズの選手まで一緒に練習している。大会に出ることは少なく、毎週水曜日の夜に１時間程度だが、金ケ崎町だけでなく遠野市や奥州市からも多くの人が来て楽しんでくれている。奥州市にも同じようなクラブがあることから、市町村を超えた組織があれば指導者のカバーもできるのでないかと思うが、土日の部活動ではなく、自分の目標のために、こういったクラブで活動するという考え方が自然になるのではないかと思う。

自分も含めて、ここにいる皆さんは部活動で頑張ってスポーツを楽しんできて、部活動の素晴らしさもわかっているため、部活動といきなり切り離せるかというのは非常に難しい問題だと思う。部活動では、体力強化ができたり、友達がふえたり、いろいろなプラスの面があるため、子供たちのために、部活動に何を求めるかということを大事にしながら地域移行を考えていく必要がある。

○郷右近浩議員

皆さんのお話を聞いて、私も25年前にサッカーのスポーツ少年団をつくったが、勝ち負けではなく、みんなが主役になり、みんなで頑張ろうという方針でやっていて、その子供たちはサッカー以外のスポーツもそれぞれやっていたことを思い出した。改めて、様々な競技に触れる機会をつくることや、生涯スポーツとして続けてもらえるような環境づくりの重要性を感じた。

○川村伸浩議員

人口減少が進む中、地域活性化には観光による交流人口をふやすことが大きなウエイトを占めている。スポーツを通じた観光は、交流しながら地域にもお金を落としてく重要な機会と考えるが、県外の交流人口の拡大や、インバウンドについて御意見を伺いたい。

〔回答：小野寺さん〕

一関国際ハーフマラソン大会では、参加者に、提携店舗でのお土産の購入や食事に使っていただきたいことから地域通貨として500円の金券を配っているほか、今年度は、会場内にテント村を設置し、地元の特産品などを参加者に知っていただき、持ち帰っていただくような取り組みも計画している。大会には、全国から参加者が来るため、コロナ禍ではできなかった取り組みも再開して情報発信の場としても役立てたいと思う。

この大会は、公益財団法人日本陸上競技連盟からＳＤＧｓの取り組みとして認定され、ボランティア活動を行う機会として、中学生から一般のボランティアまで、いろいろな方に携わっていただいて大

会が運営できている。大会を継続していくためには、大人だけの大会で終わらせずに、若い世代の参画も重要であり、世代間交流の場にもなって続いていくことを願っている。
また、隣接する町などとそれぞれの地域事情を踏まえながらスポーツ交流事業を計画し、連携することで住民同士の交流も広がっており、スポーツには人をつなぐ役割もあると感じている。

〔回答：菊池さん〕
コロナ禍では東北６県の誘客に限っていたが、今年からは全国のほか、海外からも受け入れる予定で、６月には台湾からの申し込みが来ている。
修学旅行の受け入れも行いたいが、携帯の電波が入らない場所があったり、砂利道でアクセスが悪く、河川までのアクセスポイントが限られる等、安全性を確保する体制が十分でないため、整備を進めていただけるとありがたい。

〔回答：司東さん〕
岩手県でも人口がどんどん減り、移住対策に取り組んでいるが成果が出ていないと感じる。住民１人当たり125万円を消費しているというデータがあるが、８人の交流人口を生み出せば１人の住民増加と同じ効果が期待できる。観光は、見る観光から体験する観光に移行しており、奥州市のカヌーや花巻市のスポーツランド等は人気を集めており、経済効果がある。移住対策だけでなく、スポーツアクティビティに力を入れることで経済効果を上げることができると思う。
課題としては、キオクシアの工場ができた影響等により、宿泊施設の確保が難しくなっている。盛岡圏までホテルが満室で宿を確保できず、県外の参加者から申し込みができないとの声がある。参加者が少ないと大会が開催できないため、運営側としては大変厳しい状況である。

○川村伸浩議員
交流人口をふやすことによる経済効果は地域に大きく貢献すると思うので、皆様には、それぞれの立場で多くの人に広めていただき、結果として多くの人に岩手県に訪れていただくことにつながればと思う。
花巻市のホテルを見ても観光客が増加しており、週末は満室状態が続いていると聞いている。大会運営は大変かと思うが、ぜひよろしくお願いしたい。

○佐々木朋和議員
盛岡市では欧米人を含めた観光客が増加しているが、アウトドアスポーツ等は盛岡市から県内を周遊するための有効なコンテンツになると思った。
アウトドアスポーツは季節に影響されることから、年間を通して従事者を確保することや、本業とするのは難しいという話を聞いている。インバウンドのポテンシャルが出てきた岩手県において、アウトドアスポーツが観光として成り立っていくためにはどのような支援が必要か伺いたい。

〔回答：工藤さん〕
西和賀町は雪がブランドであるが、クロスカントリースキーなどのスノースポーツは用具が必要であることから用具確保に支援をいただけるとありがたい。

〔回答：菊池さん〕
私のところでラフティイングやＳＵＰ（サップ）のガイドをされている方は、本業ではなく休みの日に手伝っていただく方がほとんどである。ラフティングは５月から９月まで、ＳＵＰは４月から11

月までの期間限定のため、冬の期間は違う仕事をしなければならない。冬季の仕事をあっせんしていただき、年間を通して収入を得られる体制があれば非常に助かる。

〔回答：佐々木さん〕

遠野市には陸上競技場がないことから整備をお願いしたい。陸上競技場の地面に使用されている合成ゴムのタータンと違い、土のグラウンドは天候によって使用できず、タイムもタータンより遅くなってしまう。タイムが早いと抽選の際に有利になるため、同じくらい頑張っているのに、その違いで影響が出るのはかわいそうだと思う。

また、高校生になると陸上競技場があるところに子供たちが流出していく現象も起きている。

〔回答：小野寺さん〕

岩手県広域スポーツセンターでは、岩手県スポーツリーダーバンクというサイトを設けており、指導者やボランティア等の募集等で活用している。いろいろな項目に分かれていて、このアクティビティではどのような人材が求められているかという情報が得られる。このサイト内の情報をさらに充実させ、各種大会やイベントの情報なども掲載されればよいと思う。

海外からの観光客には、詳細なアクセス情報があると、もっと人が動くのではないかと思う。そういった情報が共有できるところがあるとよいと思う。

○佐々木朋和議員

ガイドや指導者は、それが生業になれば一番いいと思うが、一方で半スポーツ半Ｘの形もあり得ると感じた。実現のためには、土日のガイドや、部活動の指導などを本業の勤め先が理解してくれる、スポーツに対する企業の理解に努めていくことも重要だと思うし、そのことが、アスリートのセカンドキャリアなどにつながり、岩手県全体としてスポーツにやさしい県というものができ上がっていくのではないかと感じた。

施設について、一関市では令和８年度までを計画期間として、スポーツ施設を民間譲渡して運営していくことになった。人口減少の中で施設を維持していくことも大変であるが、スポーツの魅力や価値などを訴えていくことが重要だと感じた。

◆　感想など

○佐々木茂光議員

スポーツは地域に根差した文化であると感じている。本日の参加者も様々なスポーツで活躍されてきた方々であるが、活動されている方々の御意見を聞きほぐしながら今後に生かしていきたい。

○千田美津子議員

このままでは多くのスポーツに触れ合う機会が少ないが、土日の過ごし方として、家族で新しいスポーツにチャレンジしようという雰囲気になれば、家族のあり方にも変化を与えると思うし、県民自らが多くのスポーツに燃え上がる状況がつくれるのではないかと思う。

○司東さん

外国人観光客はアウトドアスポーツを利用するときに円を持ってこないことが多い。キャッシュレス対応について、事業者への補助などの対応を検討いただきたい。

○佐々木さん

イベントの周知方法はわかっていたつもりだったが、いろいろな方のお話を聞いて、違う方法があ

ることがわかり、大変参考になった。
　先ほども話したが、遠野市に陸上競技場の設置をお願いしたい。日本代表を目指して頑張っているが、道や芝生などで練習している状況である。また、陸上競技場があれば、トップアスリートを呼んで講演会などもできるようになると思う。

○小野寺さん
　県民の健康寿命を延ばすために、盛岡市や北上市、陸前高田市などで取り組まれている、ウォーキングやサイクリングを安全・安心に行うための専用道路の整備が県内全域に広がってほしい。競技スポーツが難しい方でも、ウォーキングで岩手県の自然の魅力に触れたり、地域の歴史を探訪したり、ベビーカーや車いすで出かけるといった、日常生活の中で運動の時間を確保し、自分の健康を守っていくことができたらいいと思う。

○菊池さん
　県南地域では、アウトドアスポーツをやっているところが結構あるため、奥州市でラフティングを体験したら次の機会は北上市でＳＵＰを体験するというように、参加者は順番に回ってきている状況で、団体の連携により横軸のつながりができてきている。
　家族でアウトドアスポーツを体験することで、岩手県内のアウトドアスポーツを知ってもらい広めてほしいと思う。

○工藤さん
　トップアスリートを有効活用できるように、アスリートバンクのような仕組みをつくり、現役選手や元アスリートなどが、学校やチーム、企業に出向き、テクニックを教えたり、試練の乗り越え方を講話するなどの講師依頼を県などのサイトを通じて行えるといいと思う。講師側もいろいろな仕事を抱えていることから、ボランティアではなく報酬も発生するような人材活用の仕組みが必要である。
　スポットで指導を受けたり、トップアスリートの話を聞くだけでも子供たちの人生が将来的に変わるきっかけになるかもしれない。

○黒澤さん
　有料施設での活動がふえ、利用料の自己負担が増加するのではないかと懸念している。スポーツをお金のある人だけがやるものにしないようにしていただきたい。また、施設は盛岡圏に集中するのではなく、県内全体に分散することで、全県でスポーツにかかわる雰囲気がつくれるといいと思う。
　言葉使いや子供に過度な負荷を与えない環境づくりのために、指導者への義務講習が必要だと思う。

○岩城元座長
「スポーツとアクティビティで熱くなる岩手」に向けて、皆さんからいただいた多角的な御意見やアイディアを生かしてまいりたい。本日いただいた御意見・御提言は全議員で情報共有し、今後の議会活動に生かしていく。
　お忙しいところ御参加いただいたことに感謝を申し上げ、閉会とさせていただく。